

人間・大杉栄の全体像——座談会

秋山 清

大久保典夫

大沢正道

編集部

(発言順)



秋山 清氏



大久保典夫氏



大沢正道氏

- 大杉栄の印象
- 『近代思想』の文学的位相
- 大杉栄の著作に関して
- 大杉栄・人間の魅力
- いわゆる「葉山事件」をめぐる
- 大杉栄における試行錯誤
- 人間・大杉栄の思想性
- 大杉栄の現代的評価・展望

●大杉栄の印象

秋山 これは、去年だったと思うんですがね。ある、大杉を古くから知っている人とはからずも話をする機会があつて、その時こう言われたんですよ。「君達は大杉のことをいろいろ言うけど、大杉と一緒に飯を食ってみなければ、大杉をわかるもんじゃないよ。」ってね。その時は、軽く聞いてたんだけど、一方から言うと、大杉栄はいろんなものを書き残している、それは僕達が今、大杉栄を考える一番の手掛りに足りないんです。だからそう言われた時、一方では尤もだなと思つたんです。つまり書かれた、大杉の文章や評論や主張がありますよ。だが、そういったものだけでは大杉は解らん、と言うことも無理はない。大杉は、活動家であつたし、非常に魅力のある人だったとも云う。それはそうだと思うけど、しかし、一緒に飯を食ってみなきゃ大杉が解らんと言われてしまうと、これは一寸馬鹿馬鹿しいですよ。残さない先輩達がなくなつたら、大杉栄は解らんと云う、そういうことは、これも大変困つたものだという気もするんです。大杉の人間的魅力だけが、大杉論の中心になつては、一寸困りものじゃないですか。

—— 次は大久保さんお願いします。

大久保 私は文学史をやっているわけですが、その立場からいうと、自然主義以後のいわゆる実行と芸術の問題の延長線上に、『近代思想』の大杉栄などが位置づけられる訳です。大逆事件以後の大正アナキズムというのは、関東大震災後のプロレタリア文学運動にそのまま繋がる強い一つの思想の流れであつて、そういう文学史的な位置づけの面で大杉栄に関心を持ったということが学問的には言える

と思うんです。しかし、大杉栄に最初に鮮烈な印象と興味を持ったのは、戦後間もなくのことで、敗戦直後の二四年のこと、私共が早稲田で『流』という学生同人雑誌を出した時に、尾崎士郎さんが、「草蘆晩春」というエッセイを書いてくれたんです。その中で、大杉栄とストリンドベリイについて、青年期に非常な感化を受けたということ、特にその大杉の非常に高邁な実家精神といえますかね。英雄主義者、ロマンティストであると共に、理想主義者であったとしてその魅力に触れていた。大杉栄の場合は、彼の人間的な魅力が、かなりの比重を占めているのじゃないですか。これは、政治指導者としての彼を考える場合も、無視できないんじゃないかなと思います。彼は革命家というより、むしろ芸術家だという評価がかなりあるんですね。しかし、『近代思想』などを通じて、大正前期に文壇の方にならり接近していきながら、しかし、文学史上では、例えば民衆芸術論争などで評価される位なんです。実際は大杉栄のアナキズム思想は、大正文学史の流れとかなり重なっていて、思潮史的に重要なものだと思います。彼をたんに個性的に魅力的な人物とするんじゃないで、大正思想史の総体のなかで捉えることが重要だと、最近痛感しているんです。

秋山 尾崎士郎が書いたエッセイは、何処にありますか？それは一寸見たいですね。

大久保 それは、おそらくどこにも入っていないと思います。『流』という、私共の学生同人雑誌に載せてくれたんで、単行本にはおそらく入っていないでしょう。この随筆は、枚数が二〇枚位だろうと思います。尾崎士郎さんが、戦後バージになった直後に書かれたも

のですね。それで、そういう心境などにも若干触れていられたように思います。最初のところで、大杉栄とストリンドベリイに青年期に決定的な影響を受けたということを書いているんですね。

大沢 あれも、そうですね。清水幾多郎の場合は大杉栄とコントだったと思いますが、何かで青年時代に大きな影響を受けたというか、一生懸命に読んだのは、その二人だったと書いていました。そういう影響の受け方についてのいろいろあるんじゃないかな。

秋山 私は日本の、今大久保さんが言われたように、文学史の中で大杉栄を位置づける必要があるかどうかよくわかんんですが、文学史の方からはそうする必要があるかも知れませんね。大杉の方からじゃなしにね。割合に皆、気にしているんじゃないかなと思う面があります。岩波の『文学』で（注・一九六三年九月号―第三十一巻九号）で、十年も前ですが、明治・大正・昭和の文学の座談会（注・『座談会・近代日本文学史』23『近代思想』から『文芸戦線』まで）の大正のところで、平野謙、勝本清一郎、中野重治、猪野謙二らが一寸大杉を話題にしますが、その中に非常に馬鹿げた話があつて、僕は電話で中野重治にいい、後で『婦人公論』にも少しばかり書きましたが、何か存在を気に掛けていながら、ちつとも知っていないといった感じですね。

プロレタリア文学系の方は、大杉栄はアナキストだと言って、自分達はどうに乗り越えたつもりで戦前はいたんじやないかと思うんです。あまり大杉の文学との関係については深く知っても考えてもなかった。むしろ「種まく人」のあたりからが、左翼的な文学の歴史だというような形になって宮島資夫や『近代思想』のことなどは、

前史として軽くふれて済ましている傾向があるんですよ。例えばさつき、大久保さんの話にあつた、佐藤春夫だとか、里見淳、久米正雄なども、大杉のことを書いているんです。あの時期の人達が、大杉栄に対しては、注目、そういうものをもう一遍考えてみて、という気がしてゐるんです。広津和郎なども、それに宇野浩二の書いたものの中に「大杉」はあるんじゃないでしょうか。

●『近代文学』の文学的地位

大久保 まあ、確かに大杉栄を、無理して文学史の文脈に入れることもないんですけどね。逆に、政治思想、あるいは、一般的にイデオロギーと云うものと、文学との繋がり、触れ合いという問題を今迄、あまりにもなおざりにしてきた面の方がむしろ重大だと思えます。しかし、『近代思想』自体が、一種の文芸雑誌の要素をかなり強くもつていたことも事実なんで、たとえば大正四年の『新潮』で生方敏郎は「大杉栄氏を論ず」という原稿依頼を受け、「第一君の文壇へ踏出すまでの半生については少しも知らない」などと書いています。

秋山 大正四年ですか。

大久保 四年六月です。それを読みますと、一君も、まだ文壇に出てから二年余にすぎない……という風なことも書いています。確かに『近代思想』は、集会などで、早稲田系の、島村抱月とか相馬御風とかその周辺にいた岩野泡鳴とかと接触がある訳です。また荒畑寒村・荒川義英などが、小説を発表したりして、かなり文壇との繋がりが強かったこともあって、佐藤春夫や宇野浩二や広津和郎や

いわゆる大正文士との触れ合いもあり、絶えずそのことで文壇的な話題になっていたこともあるんじゃないでしょうか。

秋山 それはかなり、僕達が今思う以上に、触れ合うところがあつた様ですね。大杉や荒畑寒村は、やはり文学と哲学の雑誌というつもりでやっている訳です、表向きは。だから、何となし『近代思想』が、アナキズム、あるいは社会主義運動の冬の時代からの最初のノロシだつていうような考え方を直ぐしますけども、『近代思想』を、中身に入つてもう一遍、文学の雑誌という面から見直すべきものがあるでしょう。私も、あれを読みながらいつその中の文学を軽んじる傾向があるんですよ。これじゃいけないと思います。

それから、大久保さんの言われた、文学と、政治との関わり方は、例えば、高橋和己が、『文学の思想』（筑摩書房刊）の中で政治とあるいは政党といいますが、『政治的権力と文学の関わり』を書いていまして、その中に、伊藤整の「チャタレイ夫人の恋人」の問題に対する日本政府の態度と新日本文学会の分裂の時の日本共産党との対立という問題を二つ並べて議論している箇所があります。それは共産党の文学運動に対してとった態度の問題、国家権力が文学に對した態度これは「政治と文学」の問題として質的に同じじゃないかといっているんです。そこに至ると、大杉栄が芸術に対してとった態度は、かなり質的に違う。それが、昭和のプロレタリア文学時代には全く忘れられています。これはアナキスト達の力が弱かつたことも一つあるんでしょうが、そこに大杉栄らの文学的発言と活動が引き継がれていたら、もう少しどうかなつたはずの、それが途中から、所謂マルクス主義、プロレタリア文学だけが左翼の文学の

ようになってしまった。そのことが、岩波の『文学』誌上で、大正文学の座談会の時にそういった観点からばかり発言がされたのですよ。私、大急ぎで大久保さんの本を拝見したんですが、《実行と芸術論》それは、私が今言ったこととは捉え方の方向が違っているとは思いますが、おそらく問題は一つだろうと、読んでそういう感じをもったんです。マルクス主義と文学との関係とは、大杉栄達が考えた実行と芸術、あの時代には、大杉栄だけじゃなくて、かなりの文学者がその問題を目にしていたように思えるんです。もう一遍、大杉の発言に耳を貸す必要があるんじゃないかならうかと考えます。

『近代思想』が、実は近代文学であったと、そこまでは斬り込めないにせよ。大久保さんの見解は、ユニークだと思いますが。

秋山 そんなことはないよ。あの当時は、だいたい皆、所謂、社会主義という言葉が全く使えなかった訳で、例えば話に会社の看板が風で落ちて、さかしまになつていても、巡査が飛んで来たという笑い話もある程、社会主義に対して日本の権力者が、敏感になつていた時期ですよ。その中で、これという発言もしないで、じつとしているのは耐えられないからと、そういう何か取締りが緩やかになつてくる時期を待つんではなくて、こっちから進んで出て行くというものが『近代思想』で、大杉・荒畑という大変元気のいい、当時は若い青年だった二人が、無政府主義とか、社会主義とかいう風には発言しなくて、むしろその中身を『近代思想』で、哲学や文学の問題として、発言したところでしょう。

●大杉栄の著作に関して

「日本脱出」などが作品としてもすぐれていて、やはり相当力をこめて書かなければ、あれだけの密度が出てこないと思うんです。その点、秋山先生いかがでしょうか。

秋山 私には、その密度なんてことは、よくわからんですけど、「自叙伝」など大変面白いと思います。それから、今言われた「新しき時代の」とかいうことは、時間を追って、民衆芸術論がいろいろ彼が発言し参加していつて、大分一般の問題になつてきた。そこで、かなり落ち着いて、腰を据えて自分の意見を展開しようとしたが、結局大杉の場合、ゆきつくところ大久保さんの言われたように、民衆とは何かという問題です。大杉は自分の畑にその問題を引張つて来ようとしたのでしょう。

それから、「生の拡充」とか「征服の事実」などは、彼の無政府主義にそれは行くと思うんです。『近代思想』では、自分達の思想をなるべく押し出したい為に、だけれども、検閲その他の弾圧を考慮して、表面に何々主義という言葉が出ないようにしながら運動としての意味を持たせようとした文章と、『新潮』などに書いてる全く生活の為に、しかし、自分の所説を曲げるんじゃないかと、そして『新潮』などにも載るような文章、この二つがある、根本的に矛盾はしてないと思いますがそういう態度は、いくらかあったんじゃないかならうか。『新潮』の古いのを見ましたら新進作家か、新人評論家か、それに似たような題で、大杉栄夫妻の写真が出てるのがありました。今では『新潮』で大杉が流行の原稿書きのように扱われているってことは、非常に奇妙な感じがします。そういう時期が短い期間でもあったんでしょう。葉山事件以後バタリと原稿などが荒

大久保 ところで、大杉栄の書いたものについての評価ですが、例えば、「本能と創造」「征服の事実」「生の拡充」など、『近代思想』に発表されたエッセイ類は、かなり忙しい時間の中で書いていると思うんです。わたし流の評価で云うと、作品としての完成度よりも、その中にある思想の強さというもので、人に訴えている訳です。

そこへゆきますと、《民衆芸術論争》の時の論文は異質なんで、私の師匠なんですが、本間久雄が、「民衆芸術の意義及び価値」というエッセイを、大正五年に書いた訳です。そのだいたい一年あとになります。おなじ「早稲田文学」に「新しき世界の為の新しき芸術」という論文を、大杉が書きます。このエッセイは、非常にすぐれた文芸評論だと思ふんです。これは、さっきふれた、「本能と創造」とか「生の拡充」とか、大杉栄の思想を断片的に出したものと違って、めりはりが効いていて、立派な作品なんです。何故、大杉が民衆芸術というものにあれ程力を入れたのか、大杉の回想を読みますと、彼は文壇人というよりも文学そのものを軽視していたんじゃないかと思ふんですが、それにしては民衆芸術に熱を入れている。しかし、よく考えれば、《民衆芸術論争》の場合でも結局、民衆ということが問題なんで、民衆の内実を言わなければ解決しないんだと云うことで、加藤一夫や本間久雄を鑑袖一触しているわけなんです。そこに社会運動家としての彼の姿勢がはっきり出ているんですけども、彼の場合、思想的なエッセイよりも、文壇的発言のほうが作品としてはおもしろい気がする。「新しき世界の為の新しき芸術」とか「民衆芸術の技巧」とか、あるいは有名な「自叙伝」

れなくなつて、大変困つたということも、その後書かれたこともあるくらいですからね。

大沢 『近代思想』のことですが、ちょっと違った捉え方もできるんじゃないでしょうか。大杉の場合には、明治の社会主義というのが、大杉の中で挫折しているということ、それを一つの契機として考えないと、やっぱり、『近代思想』が、何故生まれてきたかということが、はつきり出てこないんじゃないかと思ふんです。

大杉は赤旗事件で千葉監獄に二年半入つてゐるんですけど、獄中での一つの転換をする。自分達のこれまでやってきたことに對する空しさというか、これではダメなんだというような反省ですね。山川均も同じような回想を自伝で書いてますけども、大杉にはそういう生まのまの書いた文章はないけども、今迄クロボトキンに打ち込んで、あの当時は誰よりもクロボトキンに、幸徳なんかより精通していたと、これは幸徳自身書いていますが、そのクロボトキンを全部、とにかく捨ててしまふ、一切アナキズムに関する文書から遠ざかろうと決心する。じゃあ何をするかというと、当時の最新の社会学とか、人類学とか、新しい学問ですね。そういう種類の本をどんどん差し入れさせて、自分で自分なりに一つの新しい、何か体系的な理論を構築しようという様なことを志している訳です。そういうことをみると、明治の社会主義にみられる非常に政治主義的な傾向——哲学とか、思想とか、そういうもつと人間内部の問題が殆ど不問に付されていて、いわば政治技術みたいなこととしてのみ運動をとらえていく、そういう傾向への抵抗、そういう風じゃやっぱりダメなんで、もつと哲学的というか、自分の中の問題ですね、そういう

うところから、やり直していかなければ、新しい社会主義の運動では、展開できないんじゃないかと捉えられていたんじゃないかと思ひます。そういう意味から言うと、確かに『近代思想』というのは、弾圧に対する隠れ蓑という形があったと思うんですけど、仮にそういう条件がなかったとしても、やっぱり、そういう思想だとか、哲学とか、文学とか、そういうようなものを問題にした形を一度は通り抜けないといけないんじゃないでしょうか。そういう形で『近代思想』というものが、出てきたんじゃないかと思うんです。荒畑さんの場合は、そういう意味での何か反省が弱いというのか、ちよつと大杉のとは違うようです。荒畑さんは割合に直線型というか、最初からずっと政治の側にあつて進んで行く、逆戻りとか、自分の内側に入るとか、そういうことがあまり大事にされないような感じがするんです。大杉は曲線というか、ジグザグ型で、突進して落つこち、そこからまた飛びあがるという様なそういうダイナミックな感じですよ。

●大杉栄・人間の魅力

秋山 大杉栄の、私にとつての一番の魅力は、今、大沢君が言つてしまつた事なんですけど社会主義運動というようなもの、あるいは無政府主義という様なものは自分の、個人の生きるといふことと、いつも不可分に考えられるといふことなんです。全集の「人生について」(大杉栄全集第十四巻)という巻には、それがいろいろ顔を出している、その面白さを、あれは小さなどうでもいいような文章が多い。つまり、他の日本の社会主義の人達とここが違うんじゃない

いかと思はせるのは、自分の思想において生きるといふこと、つまり、今日明日の自分の生活までを、自分の対外的運動と区別しない。運動はこうやるけれど、家に帰ると、ああいう人間になる、そういう矛盾と分裂が殆どなかった。そこは、大杉栄の私らにとつての魅力といふか、力強さといふか、そういうものではないでしょうか。大久保 私は、やはり、大杉栄について、時代の子というような感じが非常に強くあつて、例えば、感じとして、佐藤春夫なんかと、かなり似たところがあると思ひます。思想的には白樺派の骨格に近い。勿論白樺派の教養主義的なところはないわけですけど、ああいう一種の個性万能主義、それに向日性がある。その点で、彼の周辺にいてのちテロリズムに走つていった人達と全く違うわけで、大杉の書くものを読んでもデカダンスというものが、殆ど感じられないんです。わたしは文学史が専門なものですから、そつちの方へひつかけて解釈するしかないんですけど、実行と芸術という文脈でいえば、二葉亭四迷、それから岩野泡鳴、とかなり似ていると思うんです。つまり、一元的な実行型なんで、例えば、二葉亭四迷などとは、経歴などもかなり似ている。二葉亭四迷は、陸軍士官学校を三度だか受けて落ちて、次善の策として、外国語学校のロシア語科へ行く訳です。非常に、国士的な、経国済民の志を持っている。岩野泡鳴の場合も同じようなことがいえますが、泡鳴との比較では何よりも生命主義的な思想の骨格が似ている訳で、大杉の場合は「生の拡充」ですが、泡鳴は刹那の心熱の燃焼といふことに、生きることの核心を見出している。「実行と芸術」といふ言葉で言つてもいいし、あるいは「政治と文学」といふ言葉で言つてもいいですが、そういう

示してきた、ということがあります。それで文学の方へ引きずられたという気味もあるんじゃないでしょうか。まあ大杉自身が、文学好きだということもあると思ひますけども。

●いわゆる「葉山事件」をめぐる

秋山 今、河上徹太郎の「日本のアウトサイダー」にある大杉栄のことが出ましたが、私は、大杉栄について書いた、戦後の一番くだらん文章だと思つています。大杉の書いたものも、当時の大杉達が活動した時代、殺された時代の日本の状況なども、勉強してはいないんです。神近市子に聞いた話をそのままですよ。神近市子は、別な意味で私は、大変、葉山事件の時の彼女の態度は面白いと思つていて、それについて、年をとつて、戦後になつて大杉栄に、ああいう関係で別れた人ですから、そういうことを前提にして聞いて、それに自分の判断を付け加えるならまだいいんですけどね。神近市子さんの言葉を定規にして、大杉を批判しているような馬鹿なことを書く奴が、世の中に居るのだと思つていた矢先、その本が毎日文化賞何かを貰つたのは、これ又、驚きなんですけど。だから僕は、ことあるごとに悪口を書くようにつとめているんですけど。あのそれはね、神近市子が大杉の悪口を書くのなら、これは失恋した女の、それもひどい失恋をさせられた女の恨みが生涯あつてあたりまえだ、当然だと思ふんです。その方はそれでいいんですけど、河上徹太郎が神近さんの口吻を借りて、大杉を批評したって仕様がな。

大久保 ただね、私は葉山事件の話になつたから、それに関連して、

二元的な見方をしないで、自分があくまでも、主体として、一元的に物を考えていく。そういうタイプとして、大杉栄は、今、言つた二人の文学者などと非常に似ている。それともう一つは、そういう彼の人格というものが、どこから来ているかといふことです。「自叙伝」を読んで、非常に面白いのは、すべてが、幼年学校体験に収斂していくことです。さつき、大沢さんが挫折といふことを言われましたが、大杉がいつも戻つていくところ、そのパターンは、幼年学校体験にあるんじゃないか。神近市子などが、戦後、大杉について言つたといふこと。これは、河上徹太郎の「日本のアウトサイダー」の中に書いてあることなんです。大杉といふ人は、非常に我儘な人だと言つたといふんですが、私はそれはその通りじゃないかと思ひますね。小児性、非常にいい意味の小児性を生涯持ち続けた人である。それはまた、彼が独自の、その強烈な個性をそのまま思想にしていつたところに、本当の意味の思想家としての独創性といふのがあるんじゃないかと思ひます。

秋山 大杉は、白樺派のことなど坊ちゃんだといふ言い方を一方にしなが、好意を持っていますね。

大沢 『近代思想』でも最初は文学だけじゃなくて、さつき秋山さんが言われたみたいに、哲学とか、社会学とかそういうものも、彼としては、やりたかつたようです。哲学の方では、例えばステイクルナーとか、ベルグソンとか、いろいろ紹介や批評をやつてますね。ただ、それらに対する世間の反応というものが、全然なかつたといふことです。当時の哲学者とか、社会学者とかは全然反応を示していない。文学者だけが、ともかく反応といふか、ある程度の共鳴を

一つ考えるんですけど、先程あげた「草廬晩春」という、尾崎士郎さんが、私共に書いてくれたエッセイの中で、大杉栄は、葉山事件について、三角関係だか、四角関係だかのそういう難しい関係の中で、彼のとった態度は実に、立派だったという風に、言っている。ところが、これは男の側からの評価という点かなりあるんで、例えば平塚らいてうの「わたくしの歩いた道」という、彼女が戦後だしたのを見ると、伊藤野枝と大杉栄が、逗子だかへ行く途中、らいてうのところを訪ねる場面があつて、伊藤野枝はもちろん、大杉にも好感を持っていない。大杉栄を知る前の伊藤野枝は、何ていうかな、所謂素朴なもので、純粋な、なりふりかまわぬ美しさがあつた。しかし、一緒に訪ねて来た時の彼女の格好は、大杉の好みなのか、いたずらなのか、それとも変装なのか気が知れないような、どう見てもお茶屋の女中さんのようで、非常に厭なものを感じたと言ふんです。大杉栄の所謂、自由恋愛の思想というか、考え方が、当然、事件でゆきつく所へゆきついたという風に言っています。つまり、葉山事件について、大杉栄の恋愛という次元でいうと、彼の周辺にいた人達、あるいは見ていた人達、つまり、男の側と、女の側の、神近市子、伊藤野枝、糟糠の妻の堀保子と、その繋がり方で、かなり印象が違つていたと思うんです。

秋山 それは違つて当り前でしょうね。第一、男と女が違ふのは、当然で、僕はらいてうさんに説を立てさせたつて、これはもう、いい説はでてこないと思うんです。やつぱりそれは、その話は恋愛という事で、葉山事件を僕達が考えるんなら、伊藤野枝と神近市子に聞くのが一番いいと思うんです。これは対照的ですけど、葉山事

形は違うけど。生活の面と、あるいは運動の面で、大きな挫折だと思ふんだ。実際にはあそこら出直して後が、大杉栄の死に至るまでの活動、所謂無政府主義者大杉栄の活動になると思うんです。だから葉山事件というのは、みように依る、男と女の痴話狂いと、軽くそういうことを言う人もありましようけれど、それを通り抜けた後で大杉栄は、彼なりに出来上つたとも考えられますし、葉山事件というのは、やはり非常に大きな問題であつたと思うんです。もう一つ大杉栄の恋愛について考える時、多くの明治の社会主義者が、男女平等ということを簡単に口にして、家に帰ると亭主関白である大杉栄の場合は、やはり自由恋愛を自分が実行したように、自分の家庭内でも同じような態度を、大体とれたんじやなからうかと想像されることです。あのような奇妙な関係を、それを切り抜けていった、そこを尾崎士郎が、いつているんじゃないでしょうか。

大久保 「自叙伝」の中でも葉山事件が文章として白眉です。そのなかで、確か大杉栄は「男同士の場合でもAとBの二人と付き合つていて、両方、勿論いろんな点で違うところがある。しかし、それだから同時に付き合えるんで、女性関係の場合も同じ、友人と恋人との間にさして違いをもうけないと言つてます。それと対蹠的なのが、同じような自由恋愛論者の岩野泡鳴なんで、彼の場合は一夫一婦制を信奉していて、しかし、結婚ということについては、恋愛感情がなければ形骸にしかすぎないから、即座に解消すべきだといつています。現に彼はそのやり方で、三人妻を変えていた。丁度あの頃は、蒲原英枝が現われて、伊藤野枝や神近市子と同じつながりの青鞥社グループの遠藤清子と離婚沙汰を起こし、訴訟事件などで、

件については、神近さんも随分いろいろ発言しておりますけども、吉田喜重君のつくつた映画（注・「エロス十虐殺」現代映画社作品）があまりすね。まだ、あの問題は終結してないと思うんです。神近さんがあれを仮処分にして、上映させまいとした。そういうことで評判を悪くした面もあるんですけど、私は、神近さんにあの当時のことで、一番感銘しているのは、新聞記事で幾つか見ましたけど、横浜の裁判所で、その時に「何故、大杉を刺したのか、ときかれた時、嫉妬に狂つて刺したんだ」と堂々と答つてのけて、それは、新聞記者もびくつきりして、そのまま記事にしているんです。僕はそういう態度で終始したら見事だったろうと思うんです。女が好きで男をとられて嫉妬に狂うというのは悪くないじゃないですか。はじめから匙を投げて、我慢して逃げてゆくんなら、これは勝負にならないうし、それくらい強いところがあの人には充分あつて、その後の活動をもて神近さんは、そういうものがある人ですからね。それから男の立場から、尾崎士郎が立派だったといつたのは、どういう意味か、つまり尾崎は、三角関係か、四角関係になることを見事だと言つたのではなくて、それをそういう状況の中で、自分の思う事をやり通した、そして一番自分にとつて、いい女であつた伊藤野枝と一緒になつた、世間の評判もなにもかなくなり捨ててそれを貫いたことがよかつたという意味じゃなからうかと思うんです。ああいう面倒臭い関係になることを大変いいといつたんじゃないかと思うんですがね。

大杉が、その時点で、殆ど全部彼の同志が、彼から離れちゃう、さつき、大沢君が言つたように僕もあそこがそうじゃないかと思う。

物議を醸してた訳です。それより少し遅れて、葉山事件があつて、あの頃は、盛んに男女問題、両性問題が、議論された訳です。果たしてあいつ大杉栄のような生き方が立派なのか、しかしあの場合男のエゴイズムというべきで、むしろ大杉の小児性の現われでしょう。勿論泡鳴の場合でも女の方が被害がおおきいが、すくなくとも合理的です。これは同じ大正期の自由恋愛の型として、二つのタイプとして非常に面白いと思いますね。

秋山 僕は、あまり面白いと思いませんがね。

●大杉栄における試行錯誤

大沢 一度、秋山さんに聞きたいと思つてたんですけどね。話がこゝんがらがつて来た頃に、三条件か何か出しますよね、大杉が。同棲しないで別居するつていうこと、経済的に独立するつていうこと、それからお互いの自由、性的な自由も保証するつていうのを、堀保子と神近市子と伊藤野枝の三人に出して、その結果がどうなつたかはよくわからないんですけども、大杉があれを出した真意つていうんですか、それはどこにあつたと思ひますか。

秋山 私は、困つてやつたんじゃないかと思ひます。もつと上手に裁けば良かったという風にも思うんですが、相手も相当、皆したたか者だから、大杉の思うようにはいかなくて、やつぱり追いつめられてそれじゃあ、そんな風じゃありませんか。

それから今、大久保さんの言われたこと、困つたこととか、何かそんな事を言いましたね。例えば、葉山で大杉が刺されたその当時のことをいろいろ書いているのを見ると、伊藤野枝が、東京へ帰

らんであうずしたから、ああいうことが起こった。そこらあたりに、伊藤野枝程の人でも、仲々ふん切りがつかんで、さつとそこでは帰れなかった。又大杉もそれを帰そうとしなかった。なんかねえやっぱり、未練という言葉ではちよつと言えないけど、男と女の間の奇妙にさっぱりしないところがでていて、大杉栄でさえもこんなもんかなあと、私は思うんですけど。岩野泡鳴の問題になると、家庭についていうことの形式を、大杉よりも問題にしているんですよ。妻の籍を入れなきゃならんとか、つまり当時の日本の社会の法律やしきたりというものの、女と男の関係を自由にして、いやになつたら別れるということくらいは言いますけど、なおそこで縛られている。家庭とか、結婚とか式について、彼(岩野)にはそれを壊そうとする態度はないわけです。その葛藤が、むしろそれを壊さないでその中に、自分を置いていくから、奇妙な葛藤が起こっている面も岩野泡鳴の場合はあると思います。大杉はそういうものを認めまいという態度を持っている。もつれが、つまり女の人達は、一番最初の細君の堀保子が仲々籍を抜いて別れるとは言わないし、いろいろな事があったと思うんです。大杉にすればどうにもしようがない。そんなことは、自分が考えるように他の人はいかないんだということ、追いつめられたという言葉にあたるかどうか、まあ困って、しかもなお、自分の貫きたいものはそうしたいということ、三カ条か四カ条の提案になつたんじゃないかなと考えるんですけど、大杉 大体、そうじゃないかと思ひますけど、そういう意味じゃ、あの時の大杉というのは、僕は最低ではなかったかと思うんですよ。態度が。

秋山 ええ、あれはね、あれを出した時の大杉はね、イヤならそんなのは逃げてしまえばいいんですよ。(笑)

大沢 まあ、あれは大杉が自分で言っている「生じつかな社会学」の尻っぽみたいなものでしょうね。それを一番真に受けたのが神近市子。これは彼女が一番インテリだったからでしょう、一番無視したのが野枝。堀保子という人はなかなかインテリだけど、やはり明治の女だったと思うんですよ。

秋山 最後にいけば、男について行くという態度だったものでしょうね。

大久保 葉山事件というよりも、伊藤野枝と知り合った時点、あの頃が大杉にとって一番行き詰っていた時じゃないでしょうか。

大沢 知り合った頃は、まだそうでもないんですけど。その後、『平民新聞』がダメになつて、『近代思想』を復活させ、それが又内紛もあつてダメになるという時期ですから、大杉自身の行き詰りというの、恋愛とからみあつていたとはいえますね。

大久保 私は、やはり大杉栄の場合は、氣質的なものが、かなり強く作用していると思うんです。「自叙伝」に描かれている、上からの規制に対するもの凄いい反抗心、反撥心というものがあつて、あれはもう、生命力が過剰すぎるとしかいえない。(笑)所謂規制があつてそれをねのける活力が生まれ、同時にそれが大杉そのものの存在な訳です。結局、葉山事件の場合でも、先に『近代思想』を廃刊して、それから『平民新聞』を出したのがうまくいかず、『近代思想』を出すという風な一種の試行錯誤の行き詰りを、彼の場合は、論理的に決着をつけるんじゃないやなくて、生命的なエネルギーと言

いますか、活力といいますか、そういうもので、つき抜けて行こうとするところがある。

秋山 『近代思想』をやめて『平民新聞』を出す時は、『近代思想』は別にあの雑誌をやっている限りは、行き詰つてない訳でしょ。あれはね、それでやはり彼は、革命的運動というか、社会運動をやらなきゃ、やりたい、ということ、『近代思想』をやめて、『平民新聞』に、つまり労働者へ向けて活動するというそのちの方向にいく、だからある意味じゃ、『近代思想』の様なことには見切りをつけて、次の段階を目指した、それが早かったのか、世の中の方がついてこなかったという事で行き詰つた。

大沢 ただ、『近代思想』をつぶしたのは、むしろよくわかんないんですけども、僕の場合は荒畑さんがイニシアチブをとつたんじゃないかと思ひます。荒畑さんが書いていたもの、たとえば『生活の欠伸』という感想を見ると、思うままに書けば検閲にひつかかる、だから思いもしない事を書かざるをえない、それが大変に苦痛でたまらないという様な事を書いています。検閲は役人だけでなく、編集長の自己検閲もきびしかったらしい。

秋山 それは編集長とは、大杉ですか。

大沢 そうです。ええ。大杉もかなりやっぱり、そういうことを注意してやつたというところがあるんです。勿論、大杉だって初心は社会主義運動ということにあつたろうと思ひますから、荒畑さんに引きずられたと言ひ切れはしないでしょうが。ただ、『近代思想』のああいふ方向での活動にも、やっぱり未練は、本人にもあつたと思ひます。

秋山 私はそこまでよく『近代思想』を読んでないですけど。それからね、大久保さん、又河上徹太郎のことになるんですけど、河上徹太郎の書いたものの中に、つまり神近さんの言葉から出てきたんだけど、大杉栄は日本の革命運動の中で、その後迄生きていたら彼の居る場所がなくなつただろうと言ひすることがありますね。私は共産党系のものでそういう事を言うんなら、お前達がそう思うのはそれでいいよと言ひますけど。河上徹太郎という人は評論家で哲学者のようなもので、つまりそういう運動から局外にあつて考えたり書いたりする人ですよ。そうすると大正十二年に大杉が死んで、昭和のはじめに日本のアナキズム運動が弱まって、逆に三・一五、四・一六と共産党系の運動が伸びて行つたと、そういう狭い、時間的に短いサイクルでしか見れないんなら、そういうこと誰が言つてもいいと思うんですけど、河上徹太郎のような自分はまだ相当長生きをして、日本の動きを、戦争前から戦中戦後の変化まで見てる人が、何ですかね、これは。一方から言えば、共産主義的な、何かもつと簡単に日本社会の変革が出来そうな感じを与えたような運動が退潮している。もうちよつと永い、もう一息永いサイクルであるなら、大杉栄の活動と思想についてもその評価が、今もう一度考えられていすね。そういうものが、河上のところには何もありませんよ。神近さんが言うのは、あの人がその後、マルクス主義的になり、社会党になつた人ですから、そういうのも私はまだいいと思うんですよ。神近さんだってそんなことは言わん方がいんですよ。

大久保 まあね、確かに河上徹太郎の『日本のアウトサイダー』の中では、あれが一番出来が悪いですよ。

秋山 ええ、一番つまらんでしょう。

大久保 それで、私を感じてゐることは、平野謙などのような、プロレタリア文学運動を軸にして、政治と文学を評価する行き方は、じつさいは政党と文学ということなんで、マルクシズムを軸に近代文学史を考えていく様なそういう戦後の風潮からみると、アナキズムというのは傍流みたいなになってしまふ訳です。しかし、ほんとうは政治と文学ということで濾過する場合は、やはり大杉栄などの方がより重要な問題を提起している。プロレタリア文学になくて大杉にあったものというところ、これは大正の、さつき言つた白樺派とか、佐藤春夫なども重なるんですけども、あくまでも個人、個性、それを主体に考えていくということですね。社会革命からすべてが始まるという考え方があつて、個人がすつぽ抜けて、そのまま政策が行つていったのが、プロレタリア文学です。この場合には、もはや政治と文学というより政党と文学という範疇でとらえるべき筋合いのものじゃないですかね。

秋山 政治と文学の関係が「政党と文学」ということだけになったのが、大変弱いところで、いくら今はそういう事を言つても、わかつたかろうとする人も居るようになりましたけど、以前は全然ダメでしたから。

大久保 私は、「革命的ロマン主義者の群れ」(注・三省堂新書)で、大杉栄にもちよつと触れたんですけど、大正アナキズム文学で、一番、関心を持ったのは、小説では、宮島資夫の「坑夫」と、宮地嘉六の「放浪者富蔵」です。このふたつは、大正期のアナキズム運動という背景を除いては考えられない作品です。ところがこの主人

ないでしよ。形は似てるかも知れませんが、中身が大変違うような印象を受けるんです。放浪をするような人は、大杉の周辺にはそういなかったんじゃないですか。

大久保 ただね、デカダンスの問題ということで考えますとね……。

秋山 事件が、まあ恋愛事件になつていくのは失敗ですからね。もつと要領よく、岩野泡鳴流儀でもいいから、ずつと片付けていけばいいのに、それが何か一緒になつちやつて。

●人間・大杉栄の思想性

大久保 人間としてみた場合に、例えば「自叙伝」なんかみますと、大杉は、自分を臆病だとか、小心だとか書いてるでしよ。私なんかみると、大胆不敵で、放胆としかいいようがない。例えば、枕元で女が刃物をもつていて何時つきつけるかわからないのに寝ている。眠つたら大変だと思ひながら、いつの間にか眠つちやつたなどというの、維新の志士などに近いんで、私はそんな連想するんです。(笑)

秋山 あれ、眠らなかつたら、あんな事件を起こさなかつた。眠つたから起つて、それで片付いたのかもわからんし。(笑)

—— 虐殺された前後の、晩年の大杉の思想なりですね。例えば、こういう仮説を一つ立てたんですけども、もしフランスから追放された時期が震災以後であつて、そして生きのびたというか、政府の意図に引つかからなかつたら、いつ迄大杉は、日本に生存していたであろうか。大杉の使命がアナキズム運動ないしサンジカリズムの展開なりにすべて疾走したかたちで、推敲がなされないままにすべ

公のタイプが凡そ対蹠的なんで、「坑夫」の場合ですと、石井という山から山へ渡り歩いてゐる荒くれ男が、この男は無類の乱暴者で、その過剰なエネルギーを酒と女に発散する以外何も知らない。結局、仲間の鼻つまみ者になつて、最後はなぶり殺しにされちゃう訳です。それを宮島資夫は飯場頭の萩野とかいう兄貴分、これ一人が、石井の気持を理解して見守つてゐると、そういう視点で捉えている訳です。その捉え方はともかくとして、そこに一つの労働者のタイプが描かれてる。それからいまいつが、「放浪者富蔵」の場合で、これは全く逆に生命力が欠乏しているタイプなんです。それで何処へ行つてもいづつかない。いつも何処かに楽な生活が待っているような気がして、旅から旅へあこがれ求めて放浪生活を送る。生命力が非常に過剰な、しかもアナキ的な反抗者タイプの労働者と、富蔵のようなタイプと、当時の大杉栄の周辺にいたアナキストには、大体その二つのタイプがある。大ざっぱにいうと、石井と富蔵に代表される様に思ふんですけど、これは言い過ぎですか。

秋山 どうですかね。

大沢 二つに分けてしまふのは、ちよつと無理があるんじゃないかと思ひますけど。

秋山 私は「革命的ロマン主義者の群れ」を読んで、そこを読みまして、すじを引いたんです。やつぱり、そうはつきりさしちまつたらおかしいんじゃないかとね。久板卯之助さんなどには、そういう様なものをちよつと感じられるんですけど、私は大変違ふと思います。それがみように依ると、久板さんなんか大変強い人で、自分の考えを貫くというところがあります。労働者富蔵には、それが

てを書き刻んで、命からがら散つていった様なところがある訳ですね。じゃなくて本当の推敲の時期まで、所謂吟味できる様な、例えば生前に自分の全集が出るとか、現実は無政府主義者として、サンジカリズムを指導する立場に立ち自分の思想性なり、労働運動なりの著作に目を通して、何ていうかな、自分のやつてきた自己評価なり批判ですか、そういうものがなされたとしたら、一体どの程度まで、また戦後までその思想が到達したかどうかということですね。秋山 やつぱり大杉栄は、あすこで死んだから、それ以外の大杉栄はいないですよ。ことによるとまだ生きてるかも知れらん年令ですが、だからといって自分で全集出して、自分で検討するなんて、そんなことはないでしょう。フランスから帰つて震災までの短い期間の大杉の活動がある訳ですよ。

大沢 帰つてから、帰つて来たのは七月ですね。すぐ毎晩のようにいろんなグループやあるいは組合の集會に彼が行つて、向うの話をしています。それからアナキストの全国同盟みたいな全国組織みたいなをつくらうという意図は、どうも確かにあつたようで、近藤憲二さんなんかをその下工作もあつてか、北九州の方へ派遣したりして、八月の末にそのための会合を東京で開いてゐるんです。大杉は前から上海へ行った時も、中国や朝鮮、所謂アジアというか、極東のアナキストとの連絡グループみたいなをつくらうと試みたことがあるようです。フランスへ行った時も、フランスにいる中国人の中でそういうことをやっている。そういうアナキスト連盟というのか、アナキスト連盟というのか、そういうものの必要性は感じてたし、つくらうという意図は、だいたい以前からあつたようです。

秋山 つまり、それはその時までの大杉の運動は、労働者運動ということになってるんですが、その枠とは違うもののようにです。このことは今迄あまり、論議されてもいないんですけれど。近藤憲二さんからその話を僕も一寸聞いた、九州へ行った話、だが大杉がフランスから帰って何をやりかけたとか、何をやろうとしたかについていうことは、あまりいわれてもいないようです。でもそれぞれそのことに気付いていた人は、まだいるかもしれないけど。

大沢 その八月の会合に、古河三樹さんなんかも出ていますよ。古河さんの話では、その組織は仮にAの同盟と呼ばれていて、大杉のつもりでは元々、内輪というのか、素性のたしかな人だけの会合にしたかったのが、それがそうでない人まで来てしまったんで、それでちゃんとした話をしないで、また後日ということにしてしまったというんです。

秋山 僕も、それはそうとりますね。近藤さんに聞いたんじゃないですか？

大沢 そうですか。古河さんの記憶では、石黒鋭一郎とか平岩厳などが怒って途中で帰っちゃったそうです。大杉の中にも、純粹なアナキストのグループにするのか、もう少し範囲を拡げた大衆団体にするのか、その辺のところで迷ったかもしれません。

秋山 それを相談しようとしたんじゃないかと思いますが。かなり大勢集ったようですね。私はそれよりも、九州へ近藤さんなどが行った、その話の方が、つまりそれは並行していると思います。それから当時、アナキストといわれた人の中に、大杉がみて、いかかわしい人もいたと思うんです。さっき言った、あのグループなん

でそうでしょう。今、生き残っている人達はいないでしょうけど、それからもう一つの話は、安谷寛一さんなどの説として、大杉は運動をやめるつもりだったということ。

大沢 それは、大杉が確かに自分に言ったと言っているんですけどね、安谷さんは。

秋山 前は、そういうことは、安谷さん言わなかったようですよ。戦前には。

大沢 そうですか、戦後はたえず繰り返し、言ってますよ。

秋山 戦後は何かに書いたこともある。あの時、僕は一寸異様な感じがした。「矛盾」の宮島資夫などと一緒になった会合の時に、大杉が、もう自然科学が何かに、非常に興味を持って、アナキズム運動をやめたんじゃないかと俺は思う、という表現だったんです。もしそういう傾向があったとすれば、世界アナキスト大会、あれが開けなかったその無力さ、世界のアナキストに失望したということは、あったかも知れない。だけど、大杉の持っているアナキズムとは違うものじゃないかと私は考える。つまり、今迄のやってきた大杉のやり方で言えば、まわりがそのようになって、あてにならないことでも、自分のアナキズムを展開していくか、拡げていくようなこと、まだ若い年ではないような気がするんですがね。

大沢 まだ三十八ですよ。向こうへ行つて帰ってきて、がっかりしたよてなことは、あるいは言ったかもしれない。ただ自然科学に興味を持っていたことは、一貫しているんです。その辺が割合、大杉をいう場合に、あまり問題にされないが、重要なのところです。どちらかというところ、文学だとか、生の力だとか、そういう非合理的の面

だけが強調されがちなんです。今度の筑摩の『大杉栄集』にも、その視点を入れたかったんだけど、構成や枚数の点でうまく入れられませんでした。それが一番はつきりしているのは丘浅次郎の批判というか、紹介的批判がありますね、『中央公論』に載った「丘博士の生物学的人生社会観を論ず」です。あの中で大杉は自分は丘の忠実な弟子であるというような事を書いてます。彼が師と呼んだのは丘のほかにいないんじゃないでしょうか。

秋山 「進化論講話」を読んで、感動したことを書いた文章があるでしょ。あれは「自叙伝」の中、私は割合に前から、自分が好きないせもある、あいう傾向の大杉には注意してると。やっぱり相当本を読んでるって気がするんですよ。発言をみると。

私の、大杉栄における、結論の一つは、大杉栄っていうのは、かなり間口が広くて、何にでも興味をもって、勉強しながら、たのしんで生きてゆくような能力がある。そのような総合の上に、彼の革命運動がそこに立っているような気がするんです。非常に不確定なあてずっぽうな言い方ですけど、山川さんだってそういう傾向があったでしょう。

大沢 堺利彦なんかもあり、一方じゃ主義に殉じるといふか、そういう筋金の通ったところがありながら、同時に、もつと余裕というんですか、飄々たるところがある。

大久保 余裕というより啓蒙家的姿勢でしょうな。

秋山 それは、啓蒙家的姿勢にもなり得るんだけど、本人はそれで、自分が生きているという感じがあるんでしょう。世の中がきつくなつて、仲々そういう人がいないけど、大杉を一番好きなのは、

いろんなことに興味を持って、しよつちゆう触手を動かしているような、それが彼の大きさでもあるでしょう。

大久保 非常にバイタリティーのある人なんです。大杉栄が、思想家でないかという言い方をする人もいます。でも、私は大杉栄の場合は、やはり生物学とか、進化論的な自然科学とか、あるいは人類学とか、そういう教養を彼自身の独自の個性でアマルガムにして、アナキズム思想として平易に解説した人だと考えますね。しかし、ただの啓蒙家ではなく、すべてそういうものを自分の生き方と結びつけていくという、極めて実行家的な思想家だったと思います。秋山 実行というのは、自分の生きるという意味での実行でしょうね。大杉の場合は。

今日の話しは、大沢君が二、三大杉のマイナスの面をみなきやいかんていうんで、大変いいことだと思います。どうも何かやつぱりちよつと、伝説化しすぎていかんですよ。伝説化せば、英雄にしてみよう訳でしょ。自分達は大事なことじゃなくていいということにもなりかねないし、無責任にもなるんですよ。能力のないものはないようなやつぱり責任のある生き方をしなくてはいかんと思います。大杉のまわりには無責任でない人がやつぱり、幾人か揃ってます。皆彼より小さいですよ、だけど、無責任ではない。大杉がその点で信用して一緒に、仕事をやれたような人が何人居た。時代の良さかわかんけども、三人でも五人でもいるってことは、も、三人でも五人でもいるってことは、大したことじゃないかと思えます。やつぱり、あの人達がいなかったら、あんな我儘なこととして、大杉もあれ程仕事はできなかったですね。だけど、大杉が活動した期

間ていうのは、大正六年から十二年まででしょう。葉山事件以後でしよ、本当の無政府主義者大杉栄というイメージがはっきりするのは。

大沢 はっきりするのは、ロシア革命批判以後ですよ。それから先になると、ちょっと僕なんかは間口が狭くなった感じがするんです。ロシア革命批判はいいと思うんですけど、やっぱりアナキズムに少し、とらわれているんじゃないかなという感じがするんです。

秋山 それは、ロシア革命が世界的に風靡して、アナキズムを狭くともしつかりしないと、対立しにくかつたんじゃないですか。

大沢 状況の成行上やむをえなかつたとは思いますが。

秋山 みようによつては孤立無援でしょう。世界的に。しかし、短い生涯で、文学から哲学、生物学から自然科学に迄触手を動かして、仕事をしたという能力、バイタリティーですね。大久保さんの言われるとおりです。

大沢 語学力があつたですね。それにやつぱり、うんと勘がいいですよ。世の中の尖端的な動向をすぐキャッチするアンテナみたいなのがあつて、割合当時の哲学なんかだつて、ベルグソンとか、それ程、まだ紹介されてないのをどんどん研究してますね。

大久保 しかし、ベルグソンとかニーチェなどは、あの頃の当時の流行思想だと思ふんです。例えば岩野泡鳴なども、結局、ニーチェとベルグソンなんです。だから白樺派などの一つの類縁関係などみても、丁度、私がさつき時代の子と言つたけども、やはり大正の思想家だという感じが、非常にある訳なんです。

秋山 大杉栄が目をつけたのは、やつぱり『青鞥』の運動と『白樺』

でしょう。あの時代にはまだあまり受け入れられていなかったんです。

●大杉栄の現代の評価・展望

大久保 しかし、大杉栄の評価ということになってくると、そういう点で思想家、あるいは啓蒙家、それから文学者、労働運動家。そういう風なものを、全部ひつくるめねばならず、何ともむづかしい。そのうえ、自由恋愛その他、彼の生き方の問題もかわつてくる。

そういう点が一つと、もう一つは、時期によつてかなり、変動がある。例えば大正前期ですと、文学あるいは文壇とかなり接近するし、彼の晩年になってくると、そういうものと一切、関係を絶つて實際運動の方へ入っていく。そういう振幅が、かなり激しいんで、仲々トータルな評価が難しいですね。

秋山 私はもう一つ、それに自分の生活、かなり大杉流の生き方を持っているところに注目したいんです。主義の人だとか、思想の人だとかいっていると少し学問的になってくる。そういうものよりも、やつぱり生きている一人の人間だという面がアツピールしますね。そして大抵の思想家なんかより、やつぱり運動の中で自分を持っていたということではないでしょうか。

大久保 しかし、彼の個性の強さというか、主体性の強さというか、そういう風なものが、組織者としてマイナスに働いたということはないでしょうか？

秋山 それが、むしろ大杉の場合は、私は直に会つたことはないですけど、そういう様な場面で大杉に接した人達は、逆にそういうも

のが、彼の革命運動のリーダーとしての能力という風にとられてるんじゃないか。例えば、大正十二年にアナ・ボル共同戦線の労働運動を出しますね。それに協力した近藤栄蔵、これは共産主義の人ですが、彼がそのことを「コミンテルンの密使」に書いてます。大久保 彼の場合は、さつきもいったように、非常に個性が強くて、その個性の強いことが、つまり彼のアナキズム思想そのものだったといえる。彼の場合は、個性を生かすことで、一つの組織というものと繋がつていこうというより、個性を生かすことが、そのまま組織に繋がるといふ風な、一種の自在さといえますか、自然さといえますか、そういうものがあるんじゃないですか。

秋山 自然さというのは、うまいい方ですね。大沢 個性の強さだけじゃなくて、社会性というのか、そういうところで民衆と結びついてると思ひますけど。

秋山 彼の個性が、社会性の方を向いて現われているっていう、これは、説明の仕方だけ。つまり独自に引込んで、人と全然隔離して個性を、というふうなものじゃないですね。民衆の中へ入っている訳です。実際、どのようにやつたかわかりませんが、考え方として、それはさつきの民衆芸術論、(民衆とは)に帰っていくね。あれが、大杉の生き方でしょう。

大沢 それだから、個人革命と社会革命の一体化という大杉のテーマがでてくる訳です。

秋山 そのくせ、個人と団体の関係は謎だ、とかなんとかいうでしょ。あれが大変面白いんだけど、あれなんか悪く引用して、個人と

団体っていうのは、相容れないもんだという風にとられては困りますね。まあ僕達から言うて、大杉のはなしというて、大杉のいいところ何かを話すことになつてしまふけど、今日の話に出た大杉のマイナスの面ね、まだ語られていない。しかも、多分あつたであろう大杉のマイナスの面ということは、これからの大事な課題になると思ひます。

—— さつきの震災云々のことなんですけど、結局、伝説化される部分というのは、むしろ虐殺された為にかえつて美化される部分がある訳です。所謂、日本の我々が語る時もそうですけど、マスコミが扱う場合なんか特に、死期の悲惨さから推し測つて、その人の実体を歪めてしまつて、虚像を実像としてみる部分もある訳です。たまたまだから天折したものは美しいとか。

秋山 一般としてはそれもありましょうけど、大杉に関して私はそんなこと、美化なんて感じませんね。

—— むしろ死期が、偶々が、必然性を孕んでると思うんですけど、権力側によつて圧殺されたという形でしようけれども、それ以上大杉の思想が、まだ今、維持しているってことは、やはり人間大杉栄の魅力があつたからだと思ふんですが。

秋山 今、大杉の思想がまだ取り沙汰されるのは、大杉の個人的な魅力だとは考えられない。しかし大杉の思想は、個人というものを、決して何か集団とか、民衆のための犠牲にするっていうような、そういう思想じゃない。その逆なんですよ。

—— ということは、当然、当時の権力側としては、そういう思想がばいこるというのは、一番の脅威だった訳でしょうね。それらを

煮つめて、大杉栄が殺されたことになるんでしょか。

秋山 かどうかわからんけども、あいつは、いろいろ反抗する影響があるから殺つちまえたとか、目立ったやつを殺つて恐れさせようとか、じゃないですかね。ただ、震災の時に内田魯庵が書いて、安成二郎さんが書いてますね。あの時、大杉は全く罹災者として民衆の一人になつていますよ。家を持つて、家族を持つて、町の一人というのを自覚もしてたんだろ、とにかくやつと生きていてるって感じでしょう。「俺は夜警に出るぞ」とか、そういうことを言つてますよ。そういうことは極めて普通の民衆の一人であつた訳です。

——— そうしますと、「伊藤野枝全集」付録の多田・秋山対談の時に、多田氏が大杉を比して小田実に似ている面を言われましたよね。それは単なる民衆というよりも、市民運動の実践者としての……。

秋山 そういう面も大杉にはありますよ。しかしあの時は家庭の人になつて。内田魯庵が、そこよく書いてますね。

大久保 そうですね。やはり大杉の魅力はそういう何か端尻すべからざる点です。革命家などというと、いかにも深刻で、いかめしい感じを与えますが、そうじゃなくて、平常人としての生き方というのが、重なつてゐるでしょ。それがやつぱり、彼の大ききさだと思ひますよ。政治家という言葉が妥当かどうかしれないけども、私は実行家ということで言つたんですけど、維新の志士のそれこそ坂本龍馬や西郷隆盛などをみて、ああいう一つの晴朗さ、さわやかさというか、一種の屈託のなさっていうか、そういうものが、同居しているところに、究極には思想家としての大ききさがあると思うん

です。

秋山 それはそういうもんでしょ。大杉の場合は。やつぱり私も、たまたま何かの時に大杉の本を出してみるんですけど、面白いですよ。

大沢 革命家ということでは、例えば、バクーニンなんかと比べてみると、やはりバクーニンの方が革命家だという気がしますね。米騒動の時なんかでも、バクーニンだったら、大杉とは違つていたんではないか。もちろん、運動の厚さが違うし、日本ではとくに大衆と革命家が切り離されすぎているということがあるから、どうしてもそうならざるを得なかつたんだろ、と思います。

秋山 米騒動の時の大杉つていうのは、これも研究課題とすべきじゃないですか。

大沢 逸見さんなんかは、あの時大杉がバカに活躍したようなことを書いてるでしょ。どこまで信用できるのか、ちよつと。

秋山 私にはそれはあまり信用してません。あの時は動きがとれなかつたんでしょう。あれは九州に行つて、大阪まで帰つてきて、ずっと尾行がついて歩いたんですから。とれる訳がないんですよ。あの好機に何もしなかつた、できなかつたということは、これ又、違ひましよう。やつぱり米騒動が起るなんてことは、予想もしてなかつたんじゃないですか。まあ反抗の力が日本の社会全体までなかつたと思います。島国の問題もあるでしょうね。